

大地の胎内空間が意味するもの

—— インドの石窟と階段状井戸 ——

THE MEANING OF INDIAN UNDERGROUND-SPACES

—— Cave Temples and Stepwells ——

武澤秀一*

Shuichi TAKEZAWA

In India, there are two series of traditional underground-spaces. One is cave, the other is stepwell. Both of them are connected with ancient cosmologies, and in the present day the spaces have excellently healing effects on us. They are suggestive for architecture and civil engineering in the forth-coming century.

1. 地下空間の2つの系譜

インドにおける建築的な地下空間には2つの系譜が認められる —— ひとつは紀元前3世紀に遡りうる石窟寺院 (cave temple) の系譜であり、ひとつは年代確定は困難であるが2～4世紀頃から由来すると想定される壮大な階段状井戸 (stepwell, 現地ではVavあるいは地域によりBaoliと呼ばれる) の系譜である。

岩盤をくり抜く、開削する、つまり物体を除去するというマイナス(－)の行為によってプラス(＋)として出現してくるのは、物体(岩盤)の中に獲得される空間である。

とくに石窟寺院においては数量的にみれば、プラス(＋)とマイナス(－)の総和はゼロ(0)である。しかし、そこには何かが新しく生まれている。一面において物体の単なる移動にすぎないともいえるこの事態において、質料においては何の変化もない。しかし、形相において新たなものが生まれているのである。

相互に否定しつつも依存しあう物体と空間の相互の関係、その両者の境界としての表面に形態が現われる。

ステップウェルにおいては、開削された地下空間において新たな素材(石や煉瓦)が導入されて擁壁や階段が形成されるのが一般的である。しかし基本的にマイナス(－)の作業によって空間がプラス(＋)として生じる点は共通している。

1.1 石窟寺院

石窟寺院とは自然の洞窟とは異なり、人間の想像力と信仰心、そして多大の労働力と熟練の

*工博／錫用美強・建築都市設計 代表取締役所長

匠の技をもって大地の中に獲得された、建築としての形式性を強くもつ空間である。そこでは岩盤という原初の自然の内部に、建築的な形式を伴った人為の空間が孕まれている。

過去に遡りうる最古の作例は東インド、ビハール州のBarabar丘に開窟された石窟群とされ、アージーヴィカ派（ジャイナ教に似た教義をもつ一派。仏教と同時期に生まれた）のものである。しかし、その後の石窟寺院の展開においては中心的な役割を仏教が担うこととなる。総数1200以上を数えるインドの石窟寺院のうちその約75パーセントは仏教窟であり、その数は900を超える。その他、ヒンドゥー教窟が約100、ジャイナ教窟が約200とされる。

地域的にみると西インド、デカン高原北西部に数多く分布し、その数1000を数える。インド全土における石窟寺院のうち、その80パーセント以上が集中していることになる。地形、地質が石窟寺院開窟の条件に叶っていたのは勿論であるが、その他に、当時栄えていた都市や交通路そして港との関係という社会的、経済的な要因も大きく作用していたものとみられる。

主要な石窟寺院としては次のものが挙げられる ——

Barabar	Sudama Cave	(A)	BC 3c
Barabar	Lomas Rishi Cave	(A)	BC 3c
Kondivte	Chaitya Cave*	(B)	BC 2c
Bhaja	Chaitya Cave12*	(B)	BC 2c(or BC 1c)
Bedsa	Chaitya Cave*	(B)	BC 1c
Nasik	Chaitya Cave18*	(B)	BC 1c
	Chaitya Cave3*	(B)	AD 2c
	Chaitya Cave10*	(B)	AD 2c
	Chaitya Cave20*	(B)	AD 2~3c
Karle	Chaitya Cave*	(B)	AD 1c
Ajanta	Cave12*	(B)	BC 2c
	Chaitya Cave10*	(B)	BC 1c
	Chaitya Cave9*	(B)	BC 1c
	Cave11*	(B)	AD 5c
	Cave6*	(B)	AD 5c
	Cave16*	(B)	AD 5c
	Cave17	(B)	AD 5c
	Chaitya Cave19*	(B)	AD 5c
	Chaitya Cave26*	(B)	AD 5c
	Cave1*	(B)	AD 5c
	Cave2	(B)	AD 5c
Aurangabad	Chaitya Cave4*	(B)	BC 1c
	Cave3*	(B)	AD 5c
	Cave1*	(B)	AD 5c
Junagadh	"Buddhist" Cave**	(B)	AD 3~4c
Elephanta	Cave1*	(H)	AD 6~7c
Ellora	Cave29*	(H)	AD 6c
	Cave21*	(H)	AD 6c
	Cave14*	(H)	AD 6c
	Cave6*	(B)	AD 7c
	Cave5*	(B)	AD 7c

Cave10*	(B)	AD 7c
Cave11	(B)	AD 8c
Cave12*	(B)	AD 8c
Cave15*	(B→H)	AD 8c
Cave16, Kailasa Temple*	(H)	AD 8c
Cave30	(J)	AD 9c
Cave32	(J)	AD 9c

* 参考文献1)2)に図版収録

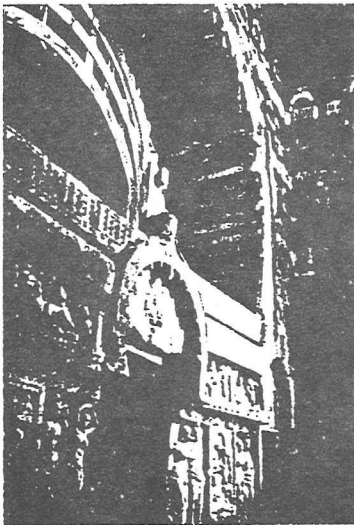
A:Ajivika sect

B:Buddhism

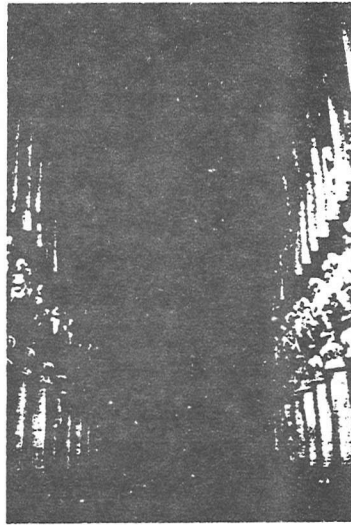
**参考文献3)に図版収録

H:Hinduism

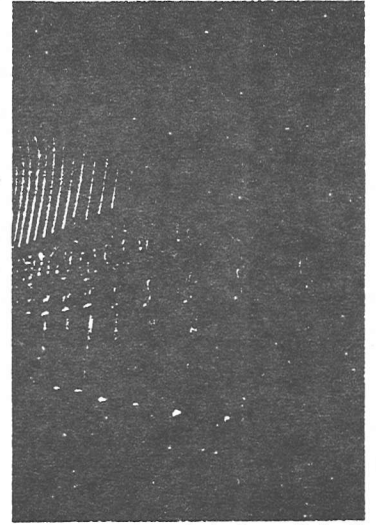
J:Jainism



Karle, Chaitya Cave. ファサド^{*}を形成する大きなチャイティヤ窓。



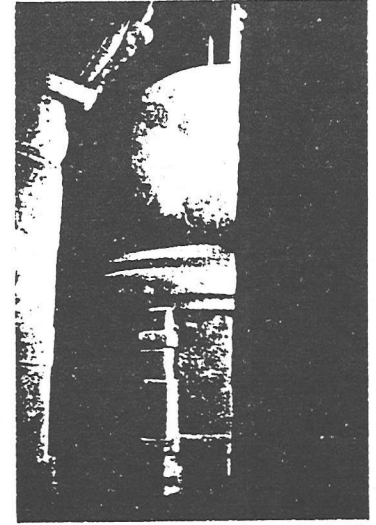
同左。壮厳、壮麗な内部空間。奥に位置するスツール^{*}/チャイティヤ。



同左。チャイティヤ窓からの光を受ける内部の列柱と木リ^{*}。



Ajanta, Chaitya Cave 19. チャイティヤ窓からの光がスツール^{*}/チャイティヤを照らし出す。



同左。チャイティヤ窓からの光を受けて暗闇に浮かび上がるスツール^{*}/チャイティヤ。

1.2 ステップウェル

ステップウェルとは地下水のレベルまで地底に降りてゆく、建築的な空間をもつ階段状の井戸である。井戸一般の起源は人類の生活共同体の形成の歴史になかにあったであろうが、形式性を強くもつ建築的な空間としての階段状の井戸の起源を特定することはむづかしい。

いうまでもなく、ステップウェルは水と結びついている。そして、この場合、飲用、洗浄用、農業用といった単に生活上の実際的要求を満たすだけでなく、沐浴をはじめとするさまざまな宗教的儀式の場として水との信仰に深く結びついた聖なる空間でもあったことが特徴である。大地の胎内に抱かれる空間が、石窟およびステップウェルに共通して、宗教の別はあっても強く宗教性とともにあったことは興味深い事実である。

ステップウェルは最初、バラモンを祭司とするヒンドゥー教系のものから始まったと考えられる。ムスリム（イスラム教徒）の侵入を受けてもなお、ステップウェル造営の系譜は続き、ムスリムの造営になるステップウェルも数多く認められる。

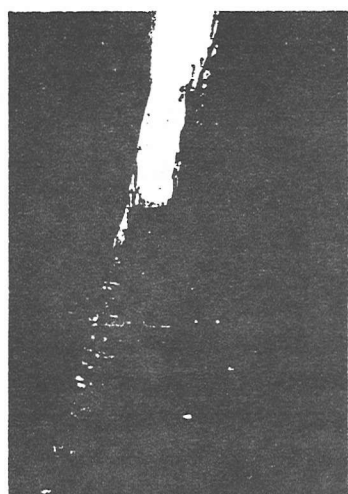
ステップウェルはアラビア海に面するインドの西端、パキスタンに国境を接するグジャラーター州に集中的に分布する。現地ではVavと呼ばれ、その数は数百とされ、保存状態のよいものは100を数える。その他、ラージャスタン州の一部、首都デリー市内およびその近郊（イスラム系のものが多く現地ではBaoliと呼ばれる）、南インドの一部地域などにも分布する。ステップウェルの存在は、乾期と雨期の差の激しい地域、降雨量の乏しい酷熱の地域という気候・風土上の条件のみならず、遠くヴェーダに起源をもつヒンドゥー教の水の神ヴァルナ（Varna、水天）信仰に深く結びついている。

主要なステップウェルとしては次のものが挙げられる ——

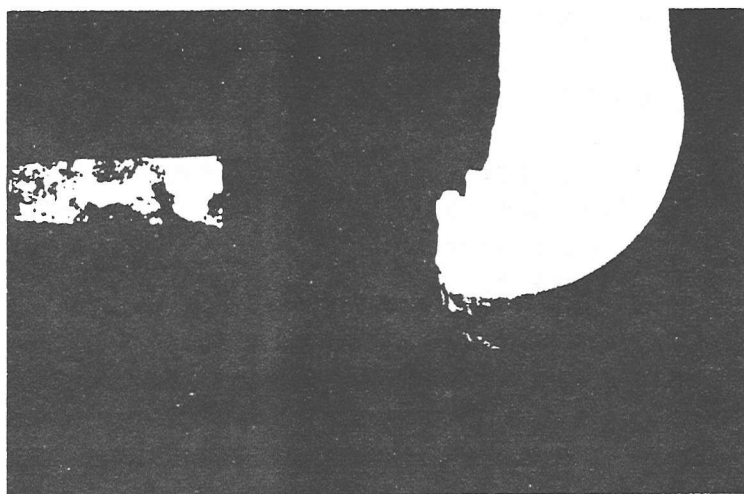
Junagadh	Navghan Kuo*		AD 2~4c, 11c
	Adi Chadi Vav*		AD 11c or 15c
Pavagadh	Herical Vav*	(H)	不詳
Patan	Rani Vav*	(H)	AD 11c
Modhera	Surya Kunda*	(H)	AD 11c
Khapadvanj	Kund Vav*	(H)	AD 12c
Ghumli	Vikia Vav*	(H)	AD 12c
Ghumli近郊	Jethah Vav*	(H)	AD 12c
Visavada	Jnan Vav*	(H)	AD 13c
Delhi	Ghandak-Ki-Baoli*	(I)	AD 13c
Delhi近郊	Ugrasen-Ki-Baoli*	(I)	AD 14~15c
Mehmedabad	Bhamaria Vav*	(I)	AD 14c
Mahesana	Vav*	(I)	不詳
Sevasi	Vav*	(I)	AD 15c
Ahmadabad	Dada Harir Vav*	(I)	AD 15c
Adalaj	Rudabhai Vav*	(H)	AD 16c
Isanpur	Jethabhai Mulji Vav	(I)	AD 19c

* 参考文献3)に
図版収録

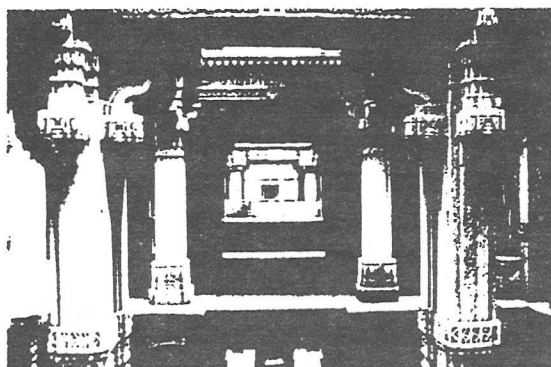
H: Hinduism
I: Islamism



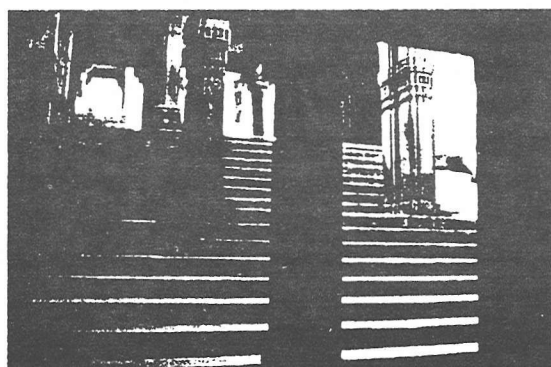
Junagadh, Adi Chadi Vav.
入口方向を見返す。



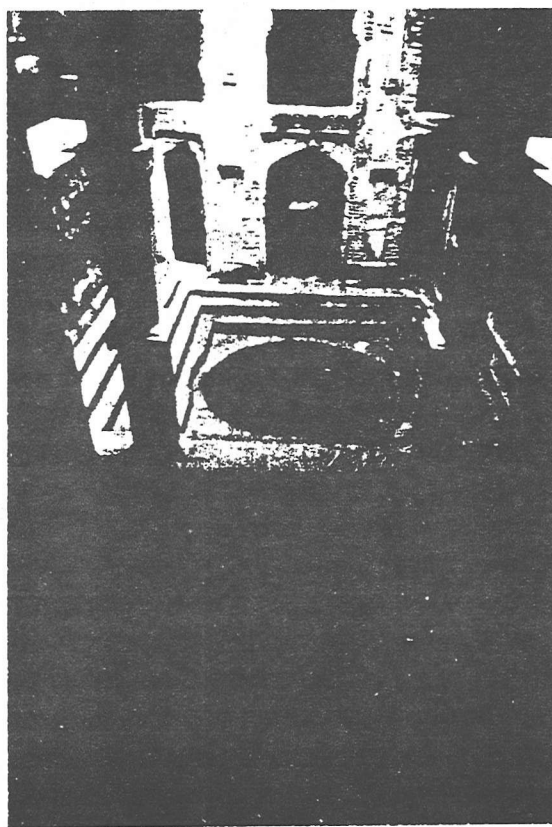
同左。最奥部を見上げる。細長い階段通路部と円筒形の井戸部の境界に岩盤の量塊がフライング・ビームとして削り残されている。



Adaraj, Rudabhai Vav. 階段上部の空間を支配する地下の立体格子。



同上。地底へ下降していく壮大な階段に柱が林立する。上部から光が射込み、“地底の森”の感がある。



同左。地底への階段を降りきったところに位置する聖なる井戸。これは主に宗教的儀礼のためのものであり、実用上の吸取り井戸はさらにこの奥に控える。

2. 地下空間獲得のプロセス

2.1 石窟寺院

石窟寺院の開窟される場所は、一般に（平地に面する）崖地が選ばれることが多い。その空間獲得における基本的な方向性は「手前から奥へ（横方向）」となる。もっともそのプロセスにおいては天井に相当する面から削り出されるため、それは「上から下へ（縦方向）」という方向性がつねに同時に伴う。こうしたプロセスによって開窟される石窟がほとんどである。

ただし、平地において開窟された石窟寺院の場合（例えばJunagadh・"Buddhist" Cave）は、アプローチ空間および採光のための吹抜け空間の開削から入るため、工程はまず「上から下へ（縦方向）」となり、次いで「手前から奥へ（横方向）」となる。また、丘陵地においても中庭や前庭をもつ石窟寺院の場合は、基本的な方向はまず「上から下へ（縦方向）」であり、次いで「手前から奥へ（横方向）」となる（例えばElephanta・Cave1, Ellora・Cave29, Cave10, Cave11, Cave12, Cave15）。当初、内部空間の獲得を本質としていた石窟寺院が、内部空間をもちながらも最終的には完全な外部形態（外形）をもつにいたり、実質的に石窟寺院は終焉を迎えることになる＊。そうした特異な石窟寺院（Ellora・Cave16[Kailasa Temple]）においても、基本的な方向は「上から下へ（縦方向）」であり、次いで「手前から奥へ（横方向）」である。この段階においても、内部空間の獲得において岩盤は天井面から削り出されるため、「上から下へ（縦方向）」という方向性を伴っているのはいうまでもない。

＊この経緯の詳細については本稿末尾に掲げる参考文献1）を参照。また、参考文献2）にも粗述されている。

2.2 ステップウェル

ステップウェルは、ほとんどの場合、平地に開削される。その空間獲得のプロセスの基本的な方向は「上から下へ（縦方向）」である。石窟寺院の場合と異なり、地下空間の側面部が石（もしくは煉瓦）の擁壁で固められ、これを支持する石（もしくは煉瓦）の梁（もしくはアーチ）が架け渡され、石の柱が規則的に立つことが多い（例外としてJunagadh・Adi Chadi Vav）。地下空間の上部は基本的に開放されるが、梁間に石の板が渡され、部分的に覆われることがある。光と影からなる明暗の変化を地下空間に与え、時に劇的なリズムの効果をもたらしている。

3. 大地の胎内空間の特質

3.1 石窟寺院

石窟寺院の空間の中に身を置くと、人は日常とは異なる感覚にとらえられる。

明確に限定された空間でありながら、そこに無限の感覚が忍び込んできく。内部空間の限界は大地の表面である。その大地自体が無限の広がりとおもっている。内部空間は無限の大地に続いていく。有限の空間が大地に接することにより無限性を得る。石窟寺院の中では有限と無限が分かちがたく融合している。

あるいはまた、こうもいえる。石窟寺院という建築的な空間の内部にいるとき、同時に人は

大地の内部にもいる。いわば二重の内部に包まれている。

石窟寺院は岩盤の中に刻み込まれた人為の空間である。人間の意図と想像力によって生み出された空間でありながら、ここには大地に抱かれるという自然への回帰がある。目に映るものは人の手によって削り出された形態でありながら、無意識の内にそこに大地の無限を直覚する。

石窟寺院においては、原初の自然の営みがもたらした裸の大地そのものと表裏をなして、人間の営為がもたらした芸術が成り立っている。自然と人為の織りなす二重性が、ここでは空間のなかで分かちあいがたく一体のものとして作用している。

一般に、あるまとまりをもった仏教窟群は礼拝対象としてのストゥーパ／チャイティアを祠るチャイティア窟と僧たちの日常生活の場であるヴィハーラ窟の組合せからなる。5世紀以降の後期に入るとヴィハーラ窟の内部の奥にBuddhaが座す仏堂が導入される*

ここで石窟寺院における空間の特質を後期ヴィハーラ窟を例にとってみてみよう。後期ヴィハーラ窟において展開された内部空間の構成は、大地の壁で囲まれた正方形平面（プラン）の空間の中に柱列によって二重に正方形をつくり出すものであった。4本の柱がつくる正方形を一つの完結した形態としてとらえ、柱と柱の間を複数の柱で分割し、大地によって囲まれた正方形の空間の中に柱列で囲まれたもう一つの正方形の空間領域を形成していったのであった。

後期ヴィハーラ窟を仔細に見ていくと、天井に削り出された梁型のあり方に変化がみられる。それらのうちでも比較的早期に開窟されたAjantaの第11窟と第6窟（上層）では天井に浮き出た梁型は柱の配列がつくる正方形の輪郭をそのままなぞり、正方形の枠内で完結する。柱が載る土台（床面に削り出されている）も同様である。しかし、その後に開窟されたヴィハーラ窟——Ajanta第16窟、第17窟、第1窟、第2窟、そしてAurangabad第3窟——では梁型は正方形の輪郭内にとどまらずに左右の両側壁まで伸び、壁に達したところには付柱が削り出され、天井の梁型と壁の付柱が結合される。一方、奥行方向に梁が柱列の正方形を超えて伸びることはない。柱が載る土台についても同様である。柱列がつくる中央の正方形が完全に自己完結していると、中心性は強められるものの、入口から正面奥の仏堂に向けての奥への軸性との関係が不確定なものとなり確たる印象を与えない。その点、正方形の二辺から左右に腕を伸ばすようなかたちで梁型が側壁にまで延長されると、柱列からなる中央の正方形が、大地に囲まれた正方形の空間の中で定着される——つまり大きな正方形と小さな正方形の関係が明確に固定される。

このとき、広間全体が奥行方向において三つの領域に区分される——仏堂の前の回廊、中央の領域、入口側の回廊。さらに外部ファサードを構成しているヴェランダがこれらに並行している——ヴェランダ（verandha）という語はわが国ではその部位が2階以上にある場合に用いられることが一般的であるが、この語は本来、ヒンディー語に由来するといわれ、ここでは建物正面の1階部分に取り付く柱廊をさす。このヴェランダを含めると、後期ヴィハーラ窟は外部から内部の奥に向かって四つの層を成していることになる。こうした層構成によって、仏堂に向かっての奥性が強化され充実する。同時に、このような層構成による奥性の強化は、Ajanta第11窟や第6窟（上層）において正方形の周辺領域が当初もっていた巡回性を弱めることになったと考えられる。

層構成による奥性の強化はまた、俗から聖へという聖域性の高まりをも演出しているとみることができる。というのも、奥に仏堂をもつ後期ヴィハーラ窟にあって、奥性とは聖性にほかならないからである。特にAjanta第6窟、第7窟、第17窟、第21窟、第1窟、第2窟、第4窟、そしてAurangabad第3窟の場合、Buddhaの座像は直接広間に面するのではなく、前室をもち、座像はその奥にある。前室自体が広間からみればすでに奥であるから、正確には奥の奥、つまり究極の最奥にBuddhaが座す。そこは正方形が示唆する聖なる大地（インドのコスモロジ

一において古来より正方形は大地を象徴する図形といわれる)の最奥に通ずる揺るぎない安息の場所なのである。

＊この経緯についても参考文献1), 2)を参照。

3・2 ステップウェル

グジャラート州に点在するステップウェルのうちでも、最も代表的かつ典型的なもののひとつであるDada Harir Vavを例に、ステップウェルの空間の特質をみてみよう。場所はAhmadabad北東部のAsarva地区に位置し、モスク、霊廟、ステップウェルと三者の複合体をなす。

ステップウェルのうち地上に現れ出ているものといえば、正面および側面に二つ、計三つのキャノピー(覆い)、それと地中から立ち上がる擁壁の壁のみである。キャノピーのついたエントランスポートにあがる。ここからいよいよステップウェルに向かって足を踏み出すことになる。時刻は午前九時すぎ、外気はすでに摂氏40度を越えている。午前とはいえ、グジャラートの焼けつくような太陽光が背中を射る。地下水の湧き出ているレベルまで、幅5メートルの壮大な階段が、階段と踊り場を交互に繰り返しながら、地下5層、深さ約17メートルの地底まで降りていく。階段上部はまったくの吹抜けで、圧倒的な太陽の熱と光を輝かせているが、今は太陽高度がまだ低く、ステップウェルの最上層を照らし出しているだけである。一方、これまた壮大な踊り場は、踊り場というにはたいへん雄大なスケールをもつ空間となっており、ここには立体格子がそびえ立つ。両側面からの土厚に対抗する梁(山留め工事における切り梁に相当)が数行・微列・微段に渡って架けられ、これらを支持する列柱群と相まって、突に見事な立体格子を形成している。各層の梁の上には石の板が架け渡され、地底に向かって降りていくにつれ、段々と多層化されたスラブ群に覆われていくことになる。したがって、下降するにつれ、上を見ると、太陽光が粹取りされた明(階段上部)と太陽光が遮断された暗(踊り場上部)の、明確な対比とリズムが刻まれる。

立体格子を形成している柱頭・柱身・柱礎、それに横架材に施されたディテールは、平面と直角を基本としたレリーフであり、強烈な太陽光を受けてそこに影による無限の雲を生み出し、そのパースペクティブをあらがいのない絶対的なものにしている。ステップを一段一段降りるごとに、世界が変わっていくような気がする。一段一段、視点が下がるごとに、立体格子の現出させている遠近法が徐々に微妙にズレて、なおのこと、いよいよ地下空間の奥深さを感じさせ、地底の空間の果てのなさ恐怖の念すら走る。それは、外の世界から地底の世界へと潜行していく心の高まりなのか、畏れなのか。途中で引き返すことなど誰にもできないような、強い力と方向性をもつ空間だ。交互に現れる階段と立体格子を通過すると、突然のごとく、二本の巨大な角柱を合体させたカップルド・ピラーが階段の真只中に屹立する。これは地底の奥深く、壮大な階段の中央にいきなり東大寺・南大門が出現したかのような驚きである。ここで地下深度12メートルにも達している(幅5メートルに対する建築的空間の深さとしては尋常のものではない)。巨大な角柱群はもちろん両側壁からの土圧に対抗する梁を支えるものである。しかし、地底階段の中央に仁王立ちする巨大な柱群は、地底の空間をいよいよただならぬ空気で満たし、そこにすでに地底空間の聖所化が始まっていることを知る。地上の熱気はとうに薄れ、ここはすでに冷気の支配する世界である。

次にAhmadabadの北西19キロほどの小村であるAdalajのRudabhai Vavをみてみよう。このステップウェルは十字形の平面(プラン)をもつ。東、南、西からと、三つの方向からの階段が、

上部が八角形に抜けているエントランスに合流したその後は、北つまり奥の井戸に向かって降りていくことになる。南の階段から降りてきた者はそのまま直進して下降することになるが、主要なアプローチとみられる東あるいは西からの階段からきた者は合流点で右折、あるいは左折することになる。ここで重要なのは軸の転換が起こることである。十字のうち、エントランスへ降りるまでは東－西方向が主軸で南－北方向が副軸、この沈下したエントランスからは南－北方向が主軸で東－西方向が副軸となる——主軸と副軸の相互変換。この主軸・副軸の変換は全体の基調としての下降性と絡み合って、空間体験をことのほか豊かにする。三つの入口をもつものはAdalajのほかにもあるが——たとえばSampaのステップウェル——、とてもこのようにダイナミックな空間体験を保証してくれるものではない。また、方向転換という点についていえば、L字型平面をもつステップウェルもあるが——たとえばVisavadaのJnan VavやChatralのVav——、それらは一直線型より変化に富むものの、方向転換の限定性が強くてその空間体験の豊かさにおいてAdalajに比すべくもない。

共通のランディング（エントランス）から一段、一段、北の方向へ、つまり最奥の井戸に向かって降りていく。上部は吹き抜け、光が降り注いでいる幅七、五メートルほどの階段→多層のスラブをもち、土圧に対抗する立体格子→階段中央に屹立する巨大なカップルド・ピラー（二本抱き合わせの角柱群）→さらに多層の立体格子……と、ヴォイド（虚）とソリッド（実）、明と暗が対比のリズムを刻み、かつ角柱群が束ね柱と単独柱の強弱のリズムを誘う。そして階段の一段一段が基調となる歩行のリズムを打ち、全体のリズムに通底し、共振して、拡がる。巨大なカップルド・ピラーが屹立する階段部は奥まり、そして深まると、その奥行をも短縮されている。こうしたことが地底の深さを強調し、柱の群れの密度をいっそう濃厚なものとし、人を引き込み、人は地底の住人と化してしまう……。

4. Geo-Architectureへ——地球としての建築・都市——

近年、ウォーターフロント開発の動向に関しさまざまな角度から論議がなされています。ここにみられる進行か中止かという争点とは別に、水辺を埋め立てて広大な土地を造成し、そこに空の高みを目指してガラスの高層ビル群が林立するというような「未来都市」の一般的なイメージが本当に21世紀に求められる建築と都市の姿なのかどうかをよく考えてみる必要があると思います。私が構想するのは高さを求める開発ではなく、逆に地球の中に胎内回帰する方向です。地球の一部としての建築・都市像こそが求められていると考えるのです。

地上には森や林そして農地や牧場、河や湖沼・湿原といった生物系の自然に包まれた居住環境が形成され、住居や学校、グラウンドなどが道と公園のネットワークで結ばれます。

一転して地下ではインフラストラクチャー（都市基盤施設）が張り巡らされ、公共施設、商業施設、文化施設などが配されます。立体的に配された都市街路や都市広場が光の大きな筒となって地表の上下を結びます。

地球回帰の構想はなによりもまず地表に巣喰った巨大なガン細胞を駆逐し、大地を自然（人間も含めて）に解放するためのものです。同時に大地の胎内に抱かれることの安堵感、そしてところとからだの癒しの創出を求めているものです。地球への回帰は胎内への回帰に通ずるはずのものではないでしょうか。

これまでさまざまなかたちでジオ・フロント構想は語られてきましたが、それらはもっぱら経済効果をねらったのものが多かった。少なくともそのようなものとして受け止められてきたように思われます。そうした側面だけではなく、人間と地球が共に環境を創っていくという視点からのジオ・フロント構想がもっと強く主張され、推進されてよいように思われるのです。

そうした方向を模索するために、地球上の偉大な先例としてインドの大地に孕まれた空間の実例をご覧ください。

こうした大地の胎内空間の中に身を浸すと、いい知れぬ大地との一体感、地球との一体感に満たされ、こころもからだも癒されます。ぜひ多くの方々に直接に体験していただきたいと思います。そうした大地の原初の力を呼び起こすような建築や都市のあり方こそわれわれの求めるものでありたいと考えるからです。

ここにみた遙かな先例たちとこれからの建築・都市像を直接に結び付けるのは困難かもしれませんが、しかし、原初感覚を研ぎすまし、蘇らせ、イマジネーションと構想力をより強靱なものにしてゆくことによって一歩でも近づいてゆく努力を重ねてゆくべき時ではないでしょうか——直線的な「進歩」の世紀から循環的な「再生」の世紀へ。

今日、コンクリートは建築・都市および土木においてもっとも基本的なマテリアルですが、その主成分はもとを正せば石灰岩、つまり太古の海に生息した生物たちの死骸の集積であります。見事な打ち放しのコンクリートは生物たちの墓標なのです。大地と応答し、大地を所有し、自ら大地にメタモルフォーゼしてしまうような建築と都市。そこにおいて建築と都市は地球の最上層の地層を形成します。建築と都市と大地の共創による新たな地層の形成をめざしたいと思うのです。

5. 参考文献

- 1) 武澤秀一：『西インドの石窟寺院に関する建築形態論的研究』，東京大学学位論文，1997
- 2) 同上：『空間の生と死——アジャンターとエローラ』，丸善，1994
- 3) 同上：『インド地底紀行』，丸善，1995

* * *

洞窟は私たちを歓迎してくれる。大地のつぶやき。いずれ私たちをのみこむ地のささやき。その懷に抱かれることを、私は愛している。
頭上には美しい地球がある。私たちを生み出した美しい地球。足元には熱が、石が、火がある。
私は大地の手の中で癒されている。

地球が私たちの住まいだった。あらゆる命をその胸に抱いていた。
この宇宙という名の広大な空間のなかで。

Linda Hogan “Dwellings”, 1995

邦訳：浅見淳子

なぜ岩山を穿ち、寺院をつくるのか。なぜ大地の胎内ともいうべき岩山の内部に、仏塔を奉安し、仏像を安置するのか。なぜ窟院の中に瞑想するのだろうか。恐らくそれは、約束された時間、時の神の支配を超えた、始源の空間への回帰だろう。

久保田展弘『森の癒し』，1996